

## 目 次

本学所蔵「村絵図」の機関リポジトリ収録によせて 朴澤 直秀 …………… 1	
岐阜大学機関リポジトリとは？ …………… 3	

寸洞って何だろう!? 石橋 知可子 …………… 4	
入退館ゲートと貸出返却装置の変更 …………… 5	
図書館からのお知らせ …………… 6	

## 本学所蔵「村絵図」の機関リポジトリ収録によせて

朴澤 直 秀



## I

本学地域科学部が運営する地域資料・情報センターでは、事業の一環として、学内に所在する貴重な歴史資料（史料）である、教育学部郷土博物館収蔵史料について、再整理・情報発信を行っている。

教育学部郷土博物館には、3万点に及ぶ江戸時代・明治時代の古文書がある。これらの多くは長良川水系流域を中心とした地域の村々の庄屋（名主）家の文書であり、岐阜地域の近世・近代の歴史を知るうえでたいへん貴重かつ内容豊富な歴史的文化的財である。ゆえに、『岐阜県史』をはじめとする自治体史や研究論文にも多数、引用・掲載されてきた。また本学においては、歴史学・記録史料学（アーカイブズ学）や、日本文化・地域学習の教材としても活用されつつある。

しかしながら、郷土博物館が無人員・無予算で運営されてきたこともあり、それらの整理は不十分なままとなっている。また、収蔵体制の不備による史料の散逸も散見される。さらに、昆虫やカビなどによる食害・汚損、あるいは史料を収める酸性紙封筒・酸性紙段ボール箱の影響による紙質劣化への本格的対策もとられてこなかった。

よって、歴史的文化的財収蔵者たる本学の責務とし

て、史料の永久保存の手だてをとるとともに、近年の歴史学・記録史料学の成果に即した再整理を行うことにより、広汎に史料に関する情報を提供して、史料のさらなる活用を促す必要があるのである。

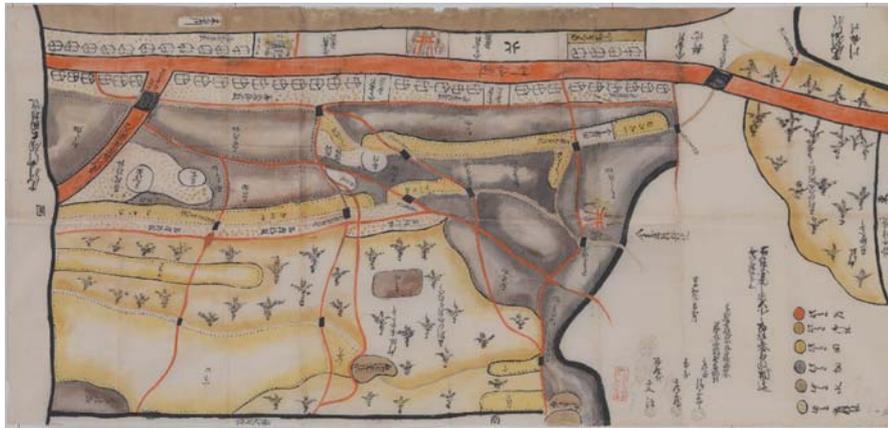
地域資料・情報センターは、単年度ごとに本学の政策経費の支援を受けて運営されているが、目下のところ、それで充当できるのは人件費プラスアルファ程度の経費である。よって事業成果の公開・還元のため、2007年度から本学の活性化経費（地域貢献）に応募している。2008年度に採択され、小稿と関連するものは「岐阜大学所蔵濃飛地域古地図（村絵図）の公開事業」である。その後、2009・2010年度に「岐阜大学所蔵地域史料の再整理と情報発信」が採択され、事業は発展的に継続されつつある。

## II

「村絵図」とは、江戸時代から明治初年にかけて作成された、村の景観を平面的に描いた絵図であり、おおむね支配者の必要に応じ領主あるいは村が作成したものである。村落景観をはじめとした、地域の過去の歴史的・地理的情報を得るうえで、必要不可欠な資料であるといえる。

郷土博物館所蔵の村絵図は、美濃国では多芸郡・山県郡・可見郡・武儀郡、飛騨国では吉城郡の諸村

などに関するものである。現在の自治体名でいえば、岐阜市・山県市・関市・可児市・御嵩町・多治見市・美濃市・養老町・大垣市・高山市・飛騨市などの範囲に含まれる。ほとんどの絵図に彩色があり、田畑や川・用排水路、山林、集落などが色で分けられている。



享和2 (1802) 年、美濃国可児郡野市場村絵図、現岐阜県可児市今渡  
(<http://repository.lib.gifu-u.ac.jp/handle/123456789/31232>)

時期としては江戸時代後期から明治時代初期のものが大部分を占める。もとは笠松陣屋（美濃国の幕府直轄領の支配にあたった役所）や高山陣屋（飛騨国の幕府直轄領の支配にあたった役所）、さらには岐阜県庁で現用・保存されていたものが、何らかの経緯により流出し、一括購入により本学学芸学部(教育学部・教養部の前身)の所蔵に帰したものと考えられる。これらは、岐阜県歴史資料館に所蔵されている村絵図と根を一つにするものであり、両方を視野に入れて活用することにより、より多くの情報を得ることができよう。そのほか、郷土博物館で「村絵図」として一括されているもののなかには、学芸学部の前身の一つである岐阜県師範学校で収集された「郷土研究資料」に由来する『大日本輿地便覧』『細見美濃国絵図』なども含まれている。

地域資料・情報センターでは、この「村絵図」につき、一点一点を清掃のうえ中性紙封筒・中性紙保存箱への整理・入れ替えを行った。また現状記録、一点ごとの細目の記録、解題の検討を行い、『岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵史料目録別冊(1)』として、図録『岐阜大学教育学部郷土博物館収蔵村絵図』を刊行し、図書館・学校・研究機関などに配布した。

さらに、図録刊行にあたって作成した画像データの、web上での公開を企図し、本学図書館に、機関リポジトリへの収録を依頼した。2009年度に収録が実現され、「村絵図」の画像は、いまや全世界に発信されることとなった。

### III

進化しつつあるインターネットは、いうまでもなく調査・研究のあり方を大きく変えつつある。筆者の専門とする日本近世史に関してまたしかりである。各地の史料所蔵機関の所蔵史料データベースがオンラインで公開され、場合によっては史料の画像データを閲覧することもできる。また、大学図書館・公共図書館のOPACに、書籍と混在して古文書の類が登録されている場合もある。

筆者はこのところ、研究活動の一部として、江戸時代に広く流布した、寺院関係の偽法令写本の収集・検討に取り組んでいる。こういった場合、従来であれば大きな図書館や大学研究室、あるいは国文学研究資料館史料館(現・国文学研究資料館)などに行き、そこに蓄積されている史料目録をひたすらめくって当たりをつけるか、史料所蔵

機関を訪問してカード目録や内部目録をめくるか、検索手段がなかった。しかし今はそれに加え、オンラインのデータベースで、適宜キーワードを入れれば、全国各地の史料所蔵機関における所蔵状況を、居ながらにして効率よく確認することができるのである。

とはいえ、個々の写本のもつ性格を検討するには、まずもってそれを含む史料群自体の性格を知ることが必要である。そのためには、史料群の伝来状況などの解題情報を調べるだけではなく、なにより史料群全体を(その構造に留意して)見渡し、その特質をいわば感得する必要がある。かかる作業を行うにあたっては、(オンラインであれスタンドアロンであれ)データベースは未だ不便ないし無益であることが多く、一般的に、紙目録のほうが遙かに有益である。

リポジトリに収録された「村絵図」についても、現況では、一点一点が史料の現状とは異なる順番で、ばらばらに登録されている。個々の絵図に関する作成者・宛先や法量などの情報、さらには筆致などについても、一点ごとにみることはできず、まとめて通覧・比較することができない。

個々の絵図から得られる情報を、個々の絵図が作成された事情に無頓着に捉えることは、危険である。何故なら、その絵図に何が描かれ、何が描かれなかったかということは、作成を命じた者や作成者の意図と切り離して考えることができないからである。

こういった、史料データ公開手段としてみた場合のリポジトリの「欠陥」は、図書館と、文書館(アー

カイブズ)との性格の相違にも、類似した問題であろう。図書館では、一点一点の書籍が、(本学の場合、一部別置されたものを除けば、前身校蔵書など由来を異にしていたとしても)分類法に従ってばらばらに配架される。書誌情報も、基本的には一点一点の書籍に対応して提示される(なお書籍も、前身校や各部局などの失われた歴史を掘り起こすうえでの貴重な素材なのだが、本学ではそういったことは顧慮されず、「重複図書」は容易に廃棄される)。対して文書館の考え方としては、「○○家文書」「××家文書」といったように、史料群ごとに、内部秩序を保持しつつ分類・整理・保管されるのが一般的である。

しかし、かかる相違をあげつらうのみでは生産的でない。むしろ、リポジトリの包括的性格や汎用性を活かしつつ、如何に、個々のデータの特性に応じた対応を行うかということが重要であろう。「村絵図」に即していえば、目下、前記図録の電子データ化によるリポジトリへの収載、ならびに、「村絵図」のデータと図録のデータとの相互参照を容易にすることを、図書館に依頼しているところである。また、(さまざまなきっかけでアクセスしてくる)利用者の方々に、如何に史料群全体にも目を向けてもらうかということも課題となろう。これは、根源的には歴史(学)教育の課題だということになるだろうが、リポジトリのあり方としても何か工夫はできないものであろうか。

#### IV

これまで述べてきたように、地域資料・情報センターは、「村絵図」の画像データの公開にあたって、独自のデータベース提供ではなく、機関リポジトリへの収載依頼という方法を選択したわけである。システムの安定的運用という点でも、学内の資源の有効活用という意味でも、現時点で適切な選択であったと考えている。ただ、画像データの永続的提供という観点からみるとどうであろうか。単純に言っても何らかの「リンク切れ」を招くような状況は避けねばならないだろう。過去にさまざまなプロジェク

トで断片的に作られてきたデータベース類の、いわば「死屍累々」としたありさまをみるにつけ、そういったことにも思いを致さざるを得ない。

機関リポジトリが永続性を持ち得るものか否か。また、機関リポジトリやそこに収録されたデータは、それぞれの時代で利用可能なかたちに更新されつづけていくものなのだろうか。基本的には、一方では国の政策や、リポジトリをめぐる国際的動向に左右されるものであり、他方では岐阜大学そのもののおかれた状況に左右されるものであろうが、機関リポジトリの運営主体として、念頭に置いておくべき問題であろう。

「村絵図」の場合は、現物が保存・活用されつつ、なおかつ画像データが提供されているという状態である。しかしリポジトリには、電子データしかないようなものも、蓄積されていくであろう。そういったものの永続的保存に、リポジトリの果たす役割は大きいだろう。時あたかも公文書管理法の施行を控え、国立大学法人の「公文書等」の保存・公開のあり方が問われている。リポジトリの安定的・持続的・発展的運用という課題は、そこに関連してくる可能性もあるのではなからうか。

かつて筆者は、明治時代から昭和初期にかけて存在した家史編さん機関「公爵島津家編輯所」が遺した書籍群(東京大学史料編纂所蔵「島津家本」)を調査し、書籍群のデータから逆に「公爵島津家編輯所」の歴史像の一端に迫る、という作業をしたことがある。果たして、岐阜大学の機関リポジトリは、何百年後かに(楽観的か)岐阜大学が滅びたとして、その歴史を伝える史料群として遺り得るであろうか？

以上、些か論点を拡散させてしまい読みにくくしてしまった。また、機関リポジトリなどについての誤解に基づく記述もあろうが、一利用者の眼からみた像として、ご寛恕いただきたい。末筆ながら、「村絵図」画像データの活発なご利用をお願いしたい。

(ほうざわ なおひで：地域科学部准教授)

#### 岐阜大学機関リポジトリ (<http://repository.lib.gifu-u.ac.jp/>) とは？

岐阜大学に所属する、または所属していた人の学術研究成果物(論文・研究報告等)を収集・保存してインターネット上に公開しています。現在、雑誌論文・岐阜大学紀要・博士論文などの本文の収録を進めています。

これにより、大学から情報を発信することができ、学術研究成果が広く世界中の人の目にふれることが可能となります。是非とも岐阜大学機関リポジトリへの登録にご協力願います。

登録・公開をご希望の際は [reposit@gifu-u.ac.jp](mailto:reposit@gifu-u.ac.jp) へご連絡下さい。

(図書館リポジトリ推進ワーキンググループ)

# 寸胴って何だろう!?～いち学生をつぶやき～

石橋 知可子



図書館でアルバイトをしている縁で図書館館報「寸胴」のバックナンバーを読む機会があり、このたび寸胴について書くことになりました。まず簡単に自己紹介を…名前は石橋知可子。野生動物医学研究室に所属しています。日々感謝の気持を忘れず、精進したいと思っています。

そもそも「寸胴」自体の意味を知っている方はいらっしゃるでしょうか？職員さんに伺ったところ、「あれの事です！」と、図書館の正面玄関から入って真正面にある壁を指して教えてくれましたが、え、壁？何のこと？と、更になぞが深まりました。すぐその後補足で教えていただいたウェブ上の寸胴の説明を見ると、

「寸胴とは、焼物を形成する際の途中の形で、円筒形の状態のものを言います。皿であれ花瓶であれ、寸胴の形を経て形成されるもので、陶器が作られる際に親型となる焼物の原点であると言われていた。陶壁の円筒形の壺が寸胴であり、三角形や四角形になっているものは、その寸胴が発展したものを示しているといわれ、陶器を作るとき、その親型の大事さをうたったものである。言い換えれば、この大学の若い研究者や多くの学生が寸胴であり、ここで大いに学び研究し、そして社会に巣立ってゆく様子を表している。」(出典：<http://www1.gifu-u.ac.jp/~gulib/kanpo/kanpo.html>)。

それを読んで、改めて図書館入り口正面をまじまじ見てみると…本当だ!!!こ、こんなところに!!!



これが「寸胴」

ご存知の方も多くいらっしゃるかもしれませんが、「寸胴」にこのような深い意味があることを大学に6年いながら私は全く知りませんでした。また両サイドには寸胴を作った九谷興子(くたにこうし)さんの詩も刻まれており(写真参考)正確な意味をきちんと理解できたか自信は無いですが、その詩に強く胸を打たれました(<http://www1.gifu-u.ac.jp/~gulib/kanpo/zundohu.html>)。気になった方はぜひ見てみて下さい。

更に寸胴とはなんぞや、その中身を知るために館報「寸胴」を読もうではないか!!といきごみ、おそらくほぼ全部読ませていただきました。

読んだ感想は「非常におもしろい」です。稚拙な感想ですみません。例えば個人的に抜粋させていただくと、堀内孝次先生による寸胴第33号「今西文庫と私」。この今西文庫は、図書館入り口すぐの階段を3階に上がって左手に進んだちょっと奥まったところにあります。本当に今西文庫は岐阜大学図書館の財産だと思います。おそらく山登り、生き物好きな方にはたまらない本の宝庫でしょう。

また獣医学課程でお世話になった先生方が書かれたものもいくつか見られました。サークルでお世話になった、今は北海道大学の教授の坪田敏男先生が執筆された「哺乳類の生物学(寸胴第25号)」学生時代のフィールドや研究に対する思い、前図書館長であり、薬理学で大変お世話になった小森成一先生の「これからの図書館運営について(寸胴第41号)」も感慨深く読ませていただきました。

図書館でのアルバイトについては、「医学部分館でのアルバイトを終えて(寸胴第36号)」で鈴木友希さんが素晴らしい文章でまとめてくださっています。

また、寸胴には「論文検索と論文入手の概要(寸胴第38号)」等の役に立つ情報もあります。学生は研究室等に入ると論文を検索する機会が多くあると思います。中には取り寄せないと読むことのできない文献もあります。その場合は図書館にある所定の用紙に担当教員から名前とはんこを頂き、それをカウンターに持って行くと、職員さんが対応してくださいます。

つらつらと書き連ねましたが、ここには書ききれないほど、どの原稿も面白く、「先生方、学生の方、職員の方含めこんな方がいたんだ。本の紹介ではこんな面白い本があったんだ。昔はこんな図書館だったのか!」と目から鱗がおちる内容がたくさん詰まっています。「寸胴をすすめたい!!同時に、寸胴ってなんだろう?」という気持ちをもってこの原稿に取り組み、そして学んだことは、人の書いた文章の面白さや役に立つ情報源としての刊行物の役割などでした。

またこういった機会が今後あるかは分かりませんが、いつの日か自分もしっかり目的を持った自分の文章を書けるようになりたいと強く思いました。言葉があり、伝えたいものがあり、それを読み、感じ、受け取る部分、考えることは人によって異なります。寸胴を通して強く感じたこれらのことは、本を読むことや普段の会話にも通じることではないかなと思います。結局上手い文章は書けず、このような文章になってしまいましたが、今まで興味の全然無かった方が、過去、そしてこれからの寸胴に興味をもっていただく機会となったら幸いです。最後まで読んでいただき、心からありがとうございました。

(いしばし ちかこ：応用生物科学部6年)



## /// お 知 ら せ ///

医薬・生化学・物理・  
工学分野のデータベース



### SciFinder®Web 版 の利用講習会を開催します

Web 版は、クライアント版とは違って専用ソフトをインストールする必要がなく、アップデートも随時行われます。また、学内のどこからでも利用できます。これを機会に Web 版への移行をお勧めします。

**開催日時** 平成22年11月19日（金）13：00～15：00（1回目）  
15：30～17：00（2回目）

**場所** 総合情報メディアセンター1階演習室

お申込み・お問い合わせは、[gjai01036@jim.gifu-u.ac.jp](mailto:gjai01036@jim.gifu-u.ac.jp)（内線 2192）へ

海外の学位論文  
書誌抄録データベース

### ProQuest Dissertations & Theses 無料トライアル

ProQuest Dissertations & Theses は海外の学位論文書誌抄録データベースで、インターネットを通じて学位論文を検索することができます。

書誌情報は1861年から現在までの約270万件を収録、そのうち1997年から現在までの約120万件は全文が収録されています。

トライアル期間の最後の2週間のみ、全文の閲覧・ダウンロードが可能です。

（マニュアル：<http://denjo.kinokuniya.co.jp/pq/pqmanu/pqmanu.pdf>）

トライアル期間 平成22年10月12日（火）～12月25日（土）  
学内のパソコンで <http://proquest.umi.com/login> からご利用下さい

**12月12日（日）～12月25日（土）は  
学位論文全文の閲覧・ダウンロードが可能です！**

※著者の希望等により本文が収録されていない学位論文もあります。

※12月11日までとは URL が変わるため、図書館ホームページをご確認下さい。